北海道の学校図書館

発　行　北海道学校図書館協会
会　長　浦田日出雄
事務局長　齋藤　昇一
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/
印刷所　㈱北海プリント
ＴＥＬ（011）811-2396

平成24年度 青少年読書感想文全道コンクール 入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第１次、第２次審査を経て、入賞者が決定しました。12月２日(日)に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第58回　青少年読書感想文全道コンクール
第38回　北海道指定図書読書感想文コンクール
特別賞入賞者一覧

北海道知事賞	＊へいわってどんなこと？を読んで	苫小牧市樽前小	２年	澁谷　妃那
	＊海と毒薬を読んで	札幌市発寒中	３年	小澤　俊文
	＊「当たり前」の中で生きること	旭川東高	２年	青木　璃世
北海道議会議長賞	＊ケイケンは教えてくれる	室蘭市旭ヶ丘小	２年	齊藤　心音
	＊ツトムがおしえてくれたこと	札幌市屯田北小	４年	安永　響
	＊「ピアノはともだち」を読んで	函館市大船小	６年	成田　有香
	＊『羅生門』を読んで	士幌町士幌町中央中	３年	貝澤　友海
	＊東日本大震災を経て	旭川西高	２年	三村　志帆
北海道教育委員会教育長賞	＊まほうをいっぱいつかって	函館市北美原小	１年	谷口　菜緒
	＊「マリモを守る。若菜勇さんの研究」を読んで	小樽市緑小	３年	植村　柚香
	＊大切な家族だから…	八雲町東野小	５年	佐々木来都
	・『こんな夜更けにバナナかよ』を読んで	札幌市新琴似中	２年	三井　和
	＊私が侃に惹かれたわけ～素直に真っ直ぐに～	札幌南高	２年	伊田菜々花
北海道学校図書館協会長賞	・「パンケーキをたべるサイなんていない？」を読んで	教育大附属函館小	２年	吉田　千桜
	・支え合う心	室蘭市知利別小	４年	小林　拓暉
	＊みんなの温かい支えに応えるためにも…	八雲町東野小	５年	渡部　真緒
	・「生きる」とは	留萌市港南中	１年	藤江　開生
	・24人のビリー・ミリガンを読んで	旭川西高	３年	木下　愛茄
毎日新聞社賞	・「てい電が教えてくれたこと」	函館市中の沢小	２年	砂原希乃風
	・『たからものはランドセル』を読んで	留萌市東光小	４年	山方　彩裕
	・「ハナと寺子屋のなかまたち」を読んで	留萌市潮静小	６年	市川　夏鈴
	＊「地球の声に耳をすませて～地震の正体を知り、命を守る～」を読んで	室蘭市翔陽中	３年	齋藤　有里
	・二つの世界から学んだこと	函館白百合学園高	１年	成田　朋香
北海道読書推進運動協議会長賞	・「きたきつねのしあわせ」を読んで	旭川市北光小	２年	蓮尾　愛
	・「羊に名前をつけてしまった少年」を読んで	旭川市北都中	３年	佐藤　彩
	・「進むべき我が道」	旭川東高	１年	飯村　言葉
北海道青少年育成協会長賞	・支える強さ「おじいちゃんが､わすれても…」を読んで	小樽市緑小	６年	山内茉莉華
	・「羊に名前をつけてしまった少年」を読んで	室蘭市東明中	３年	荻野　結衣
北海道ＰＴＡ連合会長賞	・とても優しく、とても深い心で…	八雲町東野小	５年	竹本　香織
北海道高等学校ＰＴＡ連合会長賞	・夜回り先生と子どもたち	函館中部高	２年	加藤　皓幸
北海道教育振興会長賞	・へいわってだいじなことなんだね	江別市江別第三小	１年	河村　煌平
	・命の大切さ	八雲町東野小	４年	三田　隆登
	・「ピアノはともだち」～奇跡のピアニストからのメッセージ～	帯広市豊成小	６年	田所　希梨
	・風の中に生きる－『地をはう風のように』を読んで－	遺愛女子中	３年	佐々木琴華
	・「塩狩峠」を読んで	旭川東高	２年	森　美早紀
北海道教育文化協会賞	・「絶望の隣は希望です！」を読んで	旭川市光陽中	３年	七条佳乃子
	・小さな生命から無限に広がる世界	登別明日中等教育	１年	磯田雄一朗
はるにれ賞	＊「私のココロはガタガタはい色」	旭川市神楽小	３年	中島　瑠花
教育出版社賞	・私の願い	音更町西中音更小	６年	三田　舞
文研出版社賞	・へいわってどんなこと？をよんで	函館市深堀小	１年	大隅　透
北海道図書教材協会賞	・ピトゥスの動物園を読んで	函館市北美原小	４年	永井ことみ
図書館ネットワーク賞	・わたしのとくべつな場所	小平町小平小	４年	成田　優音
北海教育評論社賞	・「ピアノはともだち」を読んで	室蘭市八丁平小	５年	佐々木　紬
光陽社賞	・くらくてあかるいよる	室蘭市水元小	１年	三村　建成
学校賞	小学校の部	八雲町東野小学校		
	高等学校の部	北海道旭川東高等学校		

＊印は、全国コンクール応募北海道代表（自由・課題）作品です。

北海道知事賞

へいわってどんなこと？を読んで

苫小牧市立樽前小学校　２年　澁　谷　妃　那

夏はたのしいから、明るい本がいいな。外でたくさんあそびたいし、すぐに読める本。ドンと大きな字で色んな色がごちゃごちゃにぬってある。私の絵みたいでたのしそうな本。

でも、へいわって何だろう？はじめて聞いた。本をひらくと、「せんそうをしない。ばくだんをおとさない」と、くらくてこわい。じてんにも「せんそうがなく、おだやかなこと」って書いていた。早く読みおわりたいなと思いながら読んでいると、「へいわってぼくがうまれてよかったということ」と、男の子が強い目で私を見ているように書いてあった。私も男の子をじっと見た。「じゃあ、私が生まれて、しあわせだと思えるのがへいわなんだ。」と思い、もう一ど読んでみたくなって読んだ。

私のしあわせ。私は、学校にあん心して行ける。外で元気にあそべる。友だちとけんかをしても「ごめんね。いいよ。」って言える。ころしたいと思ったり、ころされたりしない。いえでは、大すきなかぞくがいつもそばにいてくれる。おこられてもはなれない。私をギュっとだきしめてくれる。生まれてきてよかったと思う。「それなら、東日本大しんさいにあった人たちは、へいわじゃないの？」と、考えた。へいわって自分のことだけじゃない気がしてきた。むずかしい。じしんにあった人も「生まれてよかった。しあわせ」と思えるように、へいわな人がへいわを広げればいいんだ。そうだよね？

私はここに生まれてよかった。大すきな人がいつもそばにいてくれる。心ぱいがない。へいわって、しあわせ・たのしい・明るい。本のような黄色い色。みんな大切ないのちがある。生まれてよかったと思える人がたくさんふえて、みんなでへいわになれたらいいのにな。外で元気にあそぶ。これも、へいわでしあわせなことだったんだ。この本にしてよかったな。明るい気もちでおわったよ。

（浜田桂子　作『へいわってどんなこと？』）

総　評

審査委員長　貴戸　和彦（札幌市立伏見小学校長）

今年の第58回青少年読書感想文全道コンクール、第38回北海道指定図書読書感想文コンクールには全道各地から昨年度の応募件数を上回る646点もの作品が寄せられました。各支部で厳正に審査されて選び抜かれた作品ばかりで、全道各地の先生方の読書教育に寄せる熱い思いとご指導、豊かな読書生活を支えてくださっている保護者の皆様の地道でひたむきな姿を知ることにもなりました。今回も総勢25名の審査委員が５部門に分かれて、読書感想文に込められた新鮮で多岐にわたる感想をしっかりと受け止めようと厳正に審査を進めました。どの作品にも本との素晴らしい出会いと喜び、自らの生活体験とつなげながら読み深めた様々な思い、新しい世界を発見した感動、自らの生き方と重ね合わせた学びの姿などが生き生きと表現されていました。特に、上位のみなさんの作品には、心を揺り動かされた大きな感動、生活体験やこれからの自らの生き方と結び付けた深く熱い思いなどがたくさん込められていました。入賞者のみなさんの生活の中に、進んで本を選んで読書に親しみ、作品としっかりと向き合おうとする豊かな読書生活が根付いていることを感じて大変嬉しく思いました。

小学校低学年の作品には、本の世界に浸った楽しさや喜び、自分の周りの様子と比べて気づいた素直な感動などが一生懸命に表現されていました。中学年の作品には主人公の生き方についての強い共感や受けた大きな感動、自分自身の体験ともつなげた感想などがしっかりと表現されていました。高学年の作品には本の内容を自らの心の中に受け止めて、作者や筆者が訴えたかったことや主人公の生き方についてなどをしっかりととらえて表現しているものが多く見られました。中学生の作品には様々な問題意識をもとにして作品としっかりと向き合い、感動を的確に表現するとともに自らの生き方に前向きに取り入れていこうとする姿が表現されていました。高校・勤労青少年の作品には自分の読書生活で磨かれてきた豊かな感性やものの見方をもとにしながらしっかりと作品と向き合い，積極的にこれからの自らの人生の中に取り入れていこうとする力強いものも見られました。作品に寄せられた熱い思いや感動を今後も持ち続けて読書を更なる自分づくりの源として成長していってほしいと強く願っています。

北海道知事賞

海と毒薬を読んで

札幌市立発寒中学校　３年　小　澤　俊　文

「はじめるそうです」浅井助手のその一言で、残酷で非人道的な行為が始まった。そして、手術に関わったすべての人の運命が、暗く深い海の底に沈んでゆくような感覚が胸をよぎった。

日本への無差別爆撃のすえに捕虜となった敵国人とはいえ、生きた人間を材料にして解剖する実験に参加を求められた主人公勝呂。その実験の目的は血液中に注入可能な生理食塩水の量、血管に注入して死亡するまでの空気量、肺の切除による死亡までの気管支断端の限界…。もう一度この本を読み返し始めるが、またここで本を閉じる。呼吸が浅く感じ、心の奥がモヤモヤして重苦しい気分に襲われる。そんな嫌な感情を払いのけたい一心で目を上げると、窓には夏の気持ちの良い青空、そして、白い綿のようなきれいな雲。そういえば勝呂もこんな景色の詩を呟こうとしていた……。しかしこの物語に描かれているのは、色で例えるとそのほとんどが灰色や鉛色。彼が耳にする波の音でさえどす黒い海を連想させる。

今、この時代に生きる僕には、生体解剖のような異常で非人道的なことがとても信じられなくて、戦争を体験している祖母に、これは物語の中だけのことだろうかと聞いてみた。すると、「あの時代は本当にひどいことがあったんだよ。」と言いながら、経験した戦争の話を少ししてくれた。それで知った。この、黒で覆いつくされたような空間は実際に存在した。その時代を経て、僕たちがいる。

病院で死ななければ毎晩の空襲で死ぬ、みんな死んでゆく時代など到底想像できない。初めはそう考えたが、ふと、本当にそうだろうか、僕がこうしている今この時、みんなが心地良い空気に包まれ、白く明るい光をあびて生きているのだろうか、そんな疑問がわいてきた。いじめられて悩んでいる人や、いじめている側の人、民族間の紛争に巻き込まれたり、自然災害によって平穏な毎日の生活を奪われてしまった人たち。主人公が感じた、黒い海にひきずり込まれるような鉛色の世界で、耐えながら生きることが日常になっている人がたくさんいるのではないだろうか。生と死の観念もはっきりしないような、異常で非人間的な毎日がくり返され日常化してしまううちに、心が麻痺してしまい、自分の置かれた一人ではどうにもならない世界で、小さな破片のように押し流されてゆく。他に生き方があるのか。人が死のうが死ぬまいが、気にかけることもない、どうでもいい、考えないこと。そんな鎖に一人一人がしばられていく恐ろしさ。僕が読みながら感じた重苦しさだ。時代は確実に進歩していて、明日は必ずやってくる。しかし、もしかすると人間の内面は、勝呂たちが生きていたその時から、そんなに大きく変わっていないのかもしれない。

戸田のように、いつか罰を受けるのは当たり前だと思いながら、人間の良心なんて考えよう一つでどうにでも変わるものだと思ったり、こんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけ、と呟く男もいる。良心の呵責は自分の心からではなく他人からの眼からしか感じない。恐怖といえば社会から受ける罰に対するもので他人の「心」への罪は恐れない。そんな習性。現実を直視しないでなんとかやり過ごそうとする態度。――しかし、そんな戸田でさえ（神というものはあるのかなぁ）と呟く。そして僕たちにも問いかける。多少の悪ならば社会から罰せられない以上はそれほどの後ろめたさ、恥ずかしさもなく今日までその生き方を通してきたのだろうかと。ゴミのポイ捨てもそうだ。人に見られていなければ捨てる。それら一つ一つが環境をこわしていくのに。海の色は空の色だ。そして、空の色は僕たちのつくる環境を映す。一人一人の小さな行いが環境を破壊し、勝呂の見たどす黒い海につながってしまうのではないだろうか。勝呂もまた、現実から目をそむけ、断われば断われたはずの残酷で許されるはずのない生体解剖を、本当の患者を手術する場面だと思い込もうとする。しかし、今まで聞かないように、気付かないように押さえ込んでいた心の呟きを聞く。（自分は何もしなかった。だが自分はいつもそこにいた。そこにいて何もしなかった…）勝呂が、何かを探すために屋上から見つめた闇の中に白く光る海。こんな恐ろしい事がくり返されないように、自分の心が訴えかけてくることに、必死に耳をかたむけようとしていたのだろう。

自分の良心のささやきを聞き続ける。一人だけでなく皆がそうすれば、闇ではなく光の方へ、僕のいる時代も進んでゆくと思う。そんな心のささやきと一緒に、どんな小さなことでもいい、夢を持とう。そうすれば、それに向かって一生懸命努力できる。一つの事柄が次の事柄を生む。物事は鎖のようにつながっている。自分の心から決して逃げずに、一人一人が夢と希望を持って生きる。そんな思いを胸に、僕は未来に向けて今を生きたい。

（遠藤周作　著『海と毒薬』）

北海道知事賞

「当たり前」の中で生きること

北海道旭川東高等学校　２年　青　木　璃　世

「神様、どうして病気は私を選んだの？」

この問いに、神様は何と答えるだろうか。

私と同じ十六歳という若さで背負いきれない程の苦しみを味わう事になった一人の少女がいた。十六歳。それは毎日が青春であり、キラキラしていると世間は想像しやすいのではないだろうか。しかし、ごく普通の少女だった彼女の十六歳は、皮肉にも苦悩の始まりだった。

木藤亜也さん、十六歳。彼女は「脊髄小脳変性症」という病を患った。この病気は、素速く滑らかな運動をするのに必要な神経細胞が変化し、ついには消えてしまうという病気である。原因不明で、完治させる治療法は見つかっていないのが現状だ。

人間は、たとえ天才的な頭脳を持っていなくても、オリンピックに出られるような運動能力がなくても、幸せになれると私は思う。

毎日を生きていられること自体が幸せなのだ。

しかし、彼女の人生には「病気」という余分な荷物がついてきてしまったのだ。

この病気は進行性の病気だった。頭は健全な人と何ら変わりはない。つまり、頭で理解していても、身体が言うことを聞かないのだ。

まだ若い彼女の辛さは、私の想像よりもはるかに苦しいものだっただろう。

毎日学校に行き、授業を受け、友達とおしゃべりし、お弁当を食べ、部活をして、自転車で帰宅する。たったこれだけのことが彼女にとっては難しい。私たちは、病気を持っていないというだけで、毎日を投げやりな気持ちで過ごしてしまってはいないだろうか。

健康だからといって、明日を迎えて生きていられるという保証はどこにもないのだ。だからといって「明日死ぬかもしれないから、今日を精一杯生きよう」と思いながら一日過ごすのは、希望で溢れる高校生にとっては、少し重すぎるとも思う。けれど少し視点を変えてみれば、「今日は一日幸せに過ごせたので、気持ち良く明日を迎えられる」ということになると思う。

当たり前であることに、幸せを感じるのは非常に難しい。毎日の繰り返しなのだから、当然その意識は薄れていくであろう。簡単な言葉で片付けてしまえば「しょうがない」とでもいうのか。

しかし、彼女に「しょうがない」という言葉は似合わなかった。多くの人間は、障害者を目の前にして、同情の気持ちを持ったことがあるだろう。同情して患者の苦しみが減るとは限らないし、同情することが良いことなのかは私には分からない。けれど彼女は、「障害者だからしょうがない」ではなく「障害者にでも出来ることは山程ある」ということを自身の体で示した。彼女は強かった。

彼女は日記にこう記している。

「こんな病気じゃなかったら恋だってできるでしょうに。誰かにすがりつきたくてたまらない。」強い彼女でも、あまりに残酷な運命を受けた彼女なりの叫びだったのだろう。

さらに彼女は心の支えであった友達と離れなければならなかった。障害者に応じた設備が整っている養護学校への転入を余儀なくされたのだ。いつも誰かの助けを必要としていた彼女の周りには笑顔で支えてくれる友達がいた。それがどんなに彼女にとってありがたかったのだろう。もちろん、一般の学校にいるより、養護学校の方が環境的にも過ごしやすい。けれど今まで苦楽を共にしてきた友達にはもう会えなくなる。一方、一般学校に残れば周りの友達への負担はかなり大きい。当然ながら、どちらの選択にも長所・短所があるのだ。彼女はおそらく養護学校に入って自分が障害者であることを認めるのと同時に、大切な友達と別れてしまうという二重の苦しみを味わったのだろう。

人々は困っている人がいれば、当たり前のように手助けする。手助けをするのが当たり前となるのは大変素晴らしいことだと思う。

けれど、手助けされるのが当たり前となってしまった人は、どこかに悔しい気持ちがあるのかもしれない。ただ一つ言えるのは、不自由のない身体を与えられた人たちは、優しさの心を忘れてはならないということだと私は思う。

彼女は病気になり、多くのことを我慢しそして失った。諦めたくなくても、諦めざるを得ないこともあったはずだ。しかし、彼女は失ったものよりも残されたものを大切にして精一杯生きていた。彼女が生前記した日記から、必死で病気と闘い、必死で生きようとする彼女の生命力が感じられた。

「ねえ、どうして病気は私を選んだの？」

彼女はこう思った。

「神様は自分に障害をお与えになった。なぜなら、私にはそれに耐える力があると信じたから。」

当たり前の「今」を精一杯生きる。こうして自分の人生が輝いていくのだろう。

（木藤亜也　著『１リットルの涙　難病と闘い続ける少女亜也の日記』）

北海道議会議長賞

ツトムがおしえてくれたこと

札幌市立屯田北小学校　4年　安　永　　響

この本を最初に読んだとき「健太はひどい」と思った。「お店に返すぞ」は絶対に言ってはいけない言葉だ。相手を自分の思ったとおりにできる言葉。相手がさからうことのできない言葉。健太も反則だとわかっていながら、この「まほうのことば」を使ってしまう。健太は弟と暮らすと楽しいことばかりだと思って、ツトムをレンタルしたんだと思う。仲良くポテトチップスを食べたり、いっしょに公園で遊んだり、健太は確かにツトムのことをかわいがっていた。でも、お母さんのひざの上をとられたり、おもちゃのロボットを何の気なしに取り上げただけで体当たりされたり、ポテトチップスを全部食べられてしまったり、健太はそんなこと思ってもみなかったんだろうな。しかも「お兄ちゃんだから」といって、がまんさせられる。だから、チャンネル争いなんかで「まほうのことば」を使ってしまったんだと思う。

僕には姉がいる。僕は姉にいやなことをするし、姉も僕にいじ悪をする。でも、お互いに言っちゃいけないことは言わない。一緒に育つなかでこんなことを言われたら相手がどんな気持ちになるかわかってくるからだ。きょうだいがいると、いやなことも楽しいこともある。「お兄ちゃん」や「お姉ちゃん」は弟や妹が生まれてすぐに「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」になるわけではない。少しずつ経験をつみ重ねていくのだと思う。弟や妹も同じだ。人は人との関係でだれでも少しずつ変わっていく。僕がいなかったら、今の姉ではなかっただろうし、姉と一緒に育たなかったら、今の僕にはならなかったと思う。人は他の人と、特に家族と影響を与え合いながらゆっくりとその人になっていく。

ただ、それだけではないかもしれない、と思える話を母から聞いた。僕の姉は僕が母のおなかにいるとき、ずっと「妹がいいな」と言っていたそうだ。だが僕が生まれた後、姉は僕が弟であることについては何も言わなかった。三ケ月ぐらいたって、僕は姉と同じ保育園に行くことになった。ある日、母が僕の部屋へ迎えに来ると姉と姉の友達が一緒に赤ちゃんの世話を手伝っていた。そして「僕は弟がほしい。サッカーできるもん」「私は妹がいいな。おままごとしたいから」とつぎつぎに母に話しかけた。そのとき母は姉が「本当は妹がほしかった」と言うかな、と聞いていたら、姉はぽつりと「私はね、とよむがほしかったんだよ」と言ったそうだ。母の話をきいて、僕は胸がきゅうっとなった。姉は「妹」とか「弟」ではなくて世界のなかでたった一人の「僕」を選んでくれたのだ。

ゆっくり関係を育てる前にまず無条件に相手をまるごと受け入れる、そういうことが家族にはあると思う。いや、もしかしたら、それこそが家族ではないだろうか。ツトムは健太にそれを教えに来てくれたのかもしれない。長いこと一人っ子だった健太が次に生まれる弟か妹をしっかり受けとめられるように。

（滝井幸代（作）　三木謙次（絵）
『レンタルロボット』）

北海道議会議長賞

「ピアノはともだち」を読んで

函館市立大船小学校　６年　成　田　有　香

「障害は個性である。」私は以前にある本からこの言葉を知りました。視覚障害者である辻井さんは、母親と二人三脚で数々の苦難を乗り越え、海外でも名誉ある「ヴァンクライバーン国際ピアノコンクール」で優勝します。

「どうして目が見えないのにピアノが弾けるのだろう。」私は最初とても疑問に感じました。しかし、辻井さんは、目が見えない事に対してハンデがあると落たんなど全くしていません。障害を受け入れ、「今の自分にできること」をきちんと理解しながら目標にむかって懸命に努力していました。健常者の何倍も努力したからこそ、ピアノが弾けるようになっていったのです。

私には、「夢」があります。それは「花屋」を経営することです。そのために、私は、毎年、春になると花や野菜を植えたり、花や植物の名前を図鑑で覚えたりしています。また、お店を経営するために、算数などの学校の勉強を一生懸命にしていきたいです。目標に向かって努力する事の大切さとどんな苦難にも負けず立ちむかう、チャレンジする事の大切さを辻井さんのピアノに対する気持ちや姿勢などから学びました。夢や目標を放っておいても芽は出ません。日々、努力という水をかけて芽が出て育つように、頑張りたいと思います。

また、本の中では、辻井さんと母親の絆の深さ、母親の辻井さんへの愛情を強く感じることができます。

数年前に私は、病気で長い間入院していた時期がありました。兄弟が多く、いつも家事や仕事で忙しそうにしているお母さんが、その時は、私に毎日付き添い、果物をむいてくれたり、色々な話を聞かせてくれました。この本を読み、その時のお母さんの優しさや愛情を思い出し、胸がとても熱くなりました。あの時、お母さんが側にいて支えになってくれたので、私は、病気を乗り越えることができました。お母さんは、私の夢も応援してくれています。私が花屋さんになりたいと言うとたくさんの花や野菜、植物の種を一緒に植え、毎日一緒に水をあげて育ててくれます。そんなお母さんには、本当に感謝の気持ちで一杯です。いつか、私が大人になったら、お母さんのような愛情あふれる母親になりたいです。

視覚障害をもつ辻井さんは、多くの失敗や挫折を繰り返してもあきらめず栄光をつかみました。私の「夢」への挑戦は、まだ始まったばかりで、この先もっとたくさんの困難が待っているでしょう。日々悩んだり、苦しいこともあるけれど、それを乗り越えることができれば、昨日よりも強くなった、大きくなった自分がきっとそこにはいると思います。奇跡の演奏で世界中の人々を幸せにしている辻井さん。私も世界中の人々に花を送り届け、幸せを感じてもらえるように。夢を叶える日々はまだ始まったばかりです。

（こうやまのりお　著
『ピアノはともだち：
奇跡のピアニスト辻井伸行の秘密』）

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
・「ゆうれいきょうりゅうのなぞ」	菅原俊太	室蘭市旭ヶ丘小学校	２年
・「スイミー」をよんで	鈴木菜菜	増毛町阿分小学校	２年
・ひとりぼっちのアヒル	盛田愛莉	函館市北美原小学校	２年
・せかいでいちばんママがすきをよんで	髙宮果優	旭川市緑が丘小学校	２年
・「パンケーキをたべるサイなんていない？」	藤元空	函館市本通小学校	１年
・へいわってどんなこと？	二瓶有彩日	小樽市桜小学校	２年
・へいわってどんなこと	吉村咲希	小樽市色内小学校	２年
・「へいわってどんなこと？」を読んで	岩本志颯	旭川市永山西小学校	２年
・てるちゃんが教えてくれたこと	中田涼雅	岩見沢市栗沢小学校	２年
・気持ちを切りかえて心も体も元気になろう	田中飛鳥	網走市南小学校	２年
・きたきつねのしあわせを読んで	桂川京	小樽市朝里小学校	２年
・『てるちゃんのかお』をよんで	小川弓來	小樽市緑小学校	１年

小学校（中学年）の部（12名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
・キレイな心、キレイな音	青柳凜夏	室蘭市旭ヶ丘小学校	４年
・神さまに質問『いのち』ってなんですか	今藤彩夏	留萌市緑丘小学校	４年
・音楽が持っている力	西川桃花	函館市深堀小学校	３年
・「見ていてね。金次郎さん。」	渡邊りか	小樽市若竹小学校	４年
・「ココロ屋」を読んで	松尾里咲	岩見沢市中央小学校	４年
・私の「こころのありか」	岡村咲愛璃	北斗市上磯小学校	４年
・「ココロ屋」を読んで	鳴海清花	函館市桔梗小学校	４年
・世界のみんながしあわせになれるように	茅野智佳	室蘭市海陽小学校	３年
・兄弟	大隅守	函館市深堀小学校	３年
・「レンタルロボット」を読んで	川岸歩夢	函館市中央小学校	３年
・「サウスポー」を読んで	西川未來	室蘭市八丁平小学校	３年
・「おかえり！盲導犬ビーン」を読んで	本田梨子	岩見沢市栗沢小学校	４年

小学校（高学年）の部（12名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
・「車いすからこんにちは」を読んで	樽見楓南	小樽市緑小学校	５年
・「秘密のスイーツ」を読んで～本当の幸せとは何かを考える～	澤野くるみ	旭川市永山東小学校	６年
・夢を追いかけ続ける人に…	神彩奈	鹿部町鹿部小学校	６年
・「二十四の瞳」を読んで	竹達望結	札幌市手稲北小学校	５年
・踏み出せ！奇跡の道へ	野々村奏風	留萌市留萌小学校	５年
・「走れ！マスワラ」を読んで	村井洸太	苫小牧市明野小学校	６年
・「真珠のつぶ」	青木元	旭川市知新小学校	６年
・「ピアノはともだち」を読んで	大山芽依	教育大附属函館小学校	５年
・「おじいちゃんが、わすれても…」を読んで	千葉愛莉	士別市士別南小学校	６年
・「おじいちゃんが、わすれても…」を読んで	丸山詩乃	函館市深堀小学校	５年
・おじいちゃんがわすれても	小野瑞貴	旭川市神楽小学校	５年
・「おじいちゃんがわすれても…」を読んで	保前美聡	帯広市緑丘小学校	６年

優秀賞

中学校の部（15名）

作品名	氏名	学校名	学年
・空をつかむまで	加藤萌結	苫小牧市和光中学校	３年
・「平和」の意味	平尾祐輔	留萌市港南中学校	３年
・「余命１ヶ月の花嫁」を読んで	金濱志保	留萌市港南中学校	３年
・し	福井和加奈	芽室町芽室西中学校	２年
・「成長した自分」	木村文絵子	遺愛女子中学校	１年
・「十二時七分～その時がきても～」	白井芽瑠	小樽市松ヶ枝中学校	２年
・『怪物はささやく』	加能里菜	小樽市松ヶ枝中学校	２年
・怪物はだれにでも	佐々木萌利	岩見沢市光陵中学校	２年
・「地をはう風のように」を読んで	大山七海	函館市赤川中学校	３年
・「真の強さと美しさ」	藤田恋	旭川市常盤中学校	２年
・家畜への愛情とは	出井有名	岩見沢市豊中学校	３年
・命から命へ	江藤春花	岩見沢市光陵中学校	２年
・「羊に名前をつけてしまった少年」を読んで	及川僚真	帯広市清川中学校	３年
・太陽のくにが教えてくれたこと	木山瑠夏	砂川市砂川中学校	２年
・生きる強さ・信じる力	鎌田彩愛	札幌市向陵中学校	３年

高等学校の部（７名）

作品名	氏名	学校名	学年
・きみの友だちを読んで	矢尾ちひろ	登別明日中等教育学校	２年
・塩狩峠を読んで	小野咲花	函館大付属柏稜高等学校	３年
・夏の忘れもの	岡﨑由花	旭川東高等学校	１年
・「凍れるいのち」を読んで	片岡美菜	旭川東高等学校	２年
・「女の一生二部・サチ子の場合」を読んで	佐久間優香	札幌聖心女子学院高等学校	２年
・『パスタでたどるイタリア史』を読んで	泉珠江	帯広柏葉高等学校	１年
・「人生のオン・ザ・ライン」	林菜穂	札幌啓成高等学校	２年

◆感想文集『北海道の読書』（平成24年度版）の普及を

第58回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校版（1,000円）
特別・優秀・優良入賞者　全作品を掲載

○中学校・高等学校版（1,000円）
特別・優秀・優良（一部）入賞者作品を掲載

【申し込み・問い合わせ先】
北海道学校図書館協会ＨＰ ＞ 読書感想文コンクールについて ＞ 北海道の読書について
札幌市立西岡南小学校　教諭　佐藤秀則　　FAX　011-582-1590

優　良　賞

小学校（低学年）の部

岩見沢市栗沢小	２年	阿部　涼葉
士別市中多寄小	２年	猪狩　　葵
岩見沢市栗沢小	２年	榎本　侑太
函館市深堀小	１年	古澤槙之介
函館市北美原小	２年	前川　北斗
室蘭市白鳥台小	２年	新藤　恭介
小樽市色内小	２年	長谷川華子
函館市深堀小	１年	菊地　由恵
小樽市色内小	２年	河田　　咲
岩見沢市日の出小	２年	井上　瑞貴
増毛町阿分小	１年	村元　昇真
音更町柳町小	１年	大石　紗綾
釧路市愛国小	２年	古田　美羽
函館市深堀小	２年	和田　里桜
札幌市藤野小	２年	伊田　紗雪
室蘭市武揚小	２年	池田　　結
函館市本通小	２年	金濵　青輝
函館市大船小	１年	坂東穂乃花
滝川市滝川第一小	２年	矢羽田真生
室蘭市海陽小	２年	鈴木　詠美

小学校（中学年）の部

小樽市望洋台小	３年	宮川　七海
北斗市市渡小	４年	鈴木　佳歩
旭川市朝日小	３年	坂田　　玲
増毛町別苅小	４年	櫛引　颯太
北見市北光小	４年	猪野　梨奈
小樽市緑小	４年	平井　嘉乃
函館市北美原小	３年	永井　大貴
旭川市永山小	４年	近江　雷蔵
苫小牧市北光小	３年	荒井　　聖
音更町鈴蘭小	３年	宇野　天那
北斗市市渡小	４年	川島　光結
苫小牧市苫小牧東小	４年	前田のどか
室蘭市海陽小	４年	三上　大翔
教育大附属旭川小	４年	工藤　羊平
苫小牧市美園小	４年	長谷川　匠
音更町東士幌小	４年	山本　妃笑
室蘭市旭ヶ丘小	４年	鮎川　陽生
八雲町東野小	４年	菊地　　颯
函館市北美原小	４年	西﨑颯一朗
室蘭市海陽小	３年	工藤　陽樹

小学校（高学年）の部

雄武町雄武小	６年	碇谷　　響
札幌市山の手小	６年	岩田有季奈
留萌市緑丘小	５年	宮田　夢菜
小樽市色内小	５年	長谷川悠斗
札幌市新川中央小	６年	佐藤　佳歩
北見市北光小	５年	佐々木偉織
岩見沢市幌向小	６年	東海林詩乃
室蘭市白鳥台小	５年	高田　星瑠
北斗市石別小	６年	其田　浩平
函館市青柳小	５年	吉尾　　耀
沼田町沼田小	６年	城田　有梨
由仁町三川小	５年	岩崎　秀真
森町鷲ノ木小	６年	平塚　広大
室蘭市旭ヶ丘小	５年	髙橋　美穂
札幌市前田中央小	５年	小西　海翔
北斗市浜分小	６年	岡島　和哉
室蘭市旭ヶ丘小	５年	神尾　織安
留萌市沖見小	６年	秋葉　紗世
旭川市神居東小	６年	米田　壱丸
森町鷲ノ木小	６年	能戸　大暉

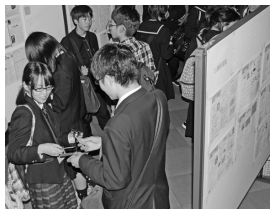
中学校の部

岩見沢市光陵中	３年	田原　美桜
岩見沢市明成中	２年	高橋　真優
苫小牧市啓明中	３年	柴田　里美
苫小牧市啓明中	１年	佐藤　真帆
森町森中	３年	出町　　舞
釧路町遠矢中	２年	岩谷　夏菜
室蘭市翔陽中	３年	葛西　春菜
藤女子中	２年	野田　梨華
留萌市留萌中	１年	斎藤　桃奈
函館市深堀中	３年	丹下坂東菜
帯広市八千代中	３年	山本　　夢
帯広市川西中	１年	山崎　瑞季
岩見沢市北村中	３年	齋藤　桃花
留萌市留萌中	１年	木原　潮音
札幌市西岡中	２年	野呂　佳永
七飯町大中山中	１年	中島　　結
北見市南中	２年	松浦　るか
音更町緑南中	１年	上山佑季奈
登別明日中等教育	１年	富田　理大
函館市赤川中	２年	川端　康浩
岩見沢市美流渡中	２年	背戸田絵理
岩見沢市光陵中	２年	山田　静乃
旭川市神楽中	１年	中島　萌花
遺愛女子中	２年	牧野　　楓

高等学校の部

帯広三条高	３年	横溝　静紅
函館商業高	２年	山田　葉月
滝川西高	２年	阿部　志穂
旭川東高	２年	應武茉里依
藤女子高	２年	山内麻由佳
札幌国際情報高	２年	石山　真結
登別明日中等教育	２年	菊地　ねね
旭川藤女子高	１年	引地志穂里
市立函館高	１年	中島　　澪
登別明日中等教育	１年	小林　大暉

第34回全道高等学校図書研究大会（十勝大会）報告



10月４日(木)５日(金)、帯広市民文化ホール、とかちプラザを主会場として、北海道高等学校文化連盟・北海道教育委員会主催の第３４回全道高等学校図書研究大会十勝大会が行われました。全道から106校、図書局員・図書委員507名、顧問130名が集まり熱気あふれる二日間になりました。

第一日目は開会式の後、12分科会に分かれて、それぞれ研修しました。第１分科会は「理想の学校図書館を語り合おう」をテーマに日々の活動の意見交換。第２分科会の「本と人をつなぐ館報づくり」では図書館報の引きつけるレイアウトや、記事の集め方などを学びました。第10分科会「十勝開拓と報徳の教え」では、十勝開拓を成功させた二宮尊親について考え、その祖父尊徳の考えを学び、午後はその足跡をたどるバスツアーに出かけました。

分科会終了後、各校の局員たちが展示された館報の前で、他校の局員たちと名刺交換ならぬ「しおり・ブックカバー交換」。約１時間の交流会を楽しみました。

第二日目は記念講演として東大教授、文芸評論家の沼野充義氏を招いて「世界は文学でできている」と題して講演をしていただきました。講演の最後では、聴衆の高校生たちとの質疑応答の時間もあり、盛り上がりをみせました。

来年の３５回大会は空知・滝川です。記念講演者など未定の部分もありますが、分科会内容などは着々と決定してきており、地元色豊かな大会が期待されます。　（文責　高文連図書専門委員長　大塚明彦）

第５４回北海道図書館大会〈平成24年９月６日(木)～７日(金)　会場　北海学園大学〉**第３分科会**

「学校図書館と公共図書館の連携の在り方　―学習支援と公共図書館―」

東京学芸大学　特任教授　**対　崎　奈美子**

『これは本』（レイン・スミス）の絵本の読み聞かせから始まった第３分科会。新学習指導要領では各教科で学校図書館が取り上げられ教科書が変わっていること、情報活用能力を育てる学校図書館をサポートするために公共図書館に求められていることなどについて話された。

はじめに　－学校図書館とは－

→学校図書館は教育的な指導が必要なものであり、公共図書館の目的とは異なっている。

１、読書・学校図書館活用にかかわる国の施策など

→2000年以降のものだけでも様々な取り組みが行われてきている。子供の読書サポーターズ会議報告書では初めて「学校司書」という言葉が使われた。学校図書館整備５か年計画では更新分が盛り込まれた。また、新聞配備や学校司書配置も策定された。

２、読書の実態を見る

→第57回読書調査をもとに、不読者数に注目。
朝の読書が広がっているのであるから、指導の在り方を考え直す時期ではないか。

３、新しい教育の展開

４、学習指導要領と学校図書館

→学校図書館からの視点で見てみると、これまでになく具体的な活動を挙げて記述されていた。参考になる児童図書とともに紹介した。

＜国語＞読み聞かせや図鑑・事典の活用など様々な言語活動に加え、情報の比較も。

＜社会＞地図や地球儀も図書館へ。『ソルハ』（帚木蓬生）はアフガニスタン情勢を知るためにも道徳学習にもおすすめ。情報モラルに関する学習は欠かせない。

＜算数・数学　理科＞『生命の樹』（ピーター・シス）、『４つのノーベル賞』（ＮＨＫ）、

＜音楽・図工・家庭・体育＞『万里の長城』（加古里子）、『ひらめき建築家ガウディ』（レイチェル・ロドリゲス）、『わたしたちの無言館』（窪島誠一郎）

＜英語・道徳・総合的な学習の時間・特別活動＞『マザーテレサの冒険』(ジアン・バオロチェゼラーニ)、『いのちってなんだろう』、『わたしのせいじゃない』(レイフ・クリスチャンソン)、『わたしのいもうと』（松谷みよ子）・・・
図書館司書は資料の専門家として、テーマとなる図書の紹介を積極的にしてほしい。特に新しい本を伝えてほしい。

５、新しい教科書と学校図書館

→実際の教科書から学校図書館にかかわる記述、探求型学習の展開、情報活用能力育成のための単元や関連図書の紹介コーナーを紹介した。社会科で取り上げられている用語についても紹介。

６、教員に対する情報サービス

７、学校図書館と公共図書館の連携の在り方

→各地で行われている連携の実際について具体例を紹介。公共図書館の貸し出しカードを学校で作成する、団体貸出しを定期的に行う、ローテーションでブックトークを学校で実施するなど。また、海外での連携の様子も紹介。学校図書館から公共図書館のデータベースにアクセスできるようになっていたり、司書を学校に派遣して読書会や様々な読書に関するプログラムを行ったりしている。博物館のような素晴らしい建物に会場からため息。

まとめにかえて－学習で活用される学校図書館となるために－

→教員に対しては、新しい図書を様々な視点で分析して紹介してほしい、郷土資料の作成、パスファインダーの作成と研修を。児童・生徒に対しては、利用の案内と課題解決へ向けたアドバイスを。

「学校図書館は、すべての子どもたちが通過するところ。学校図書館を活用する子どもたちを育てることは、生涯にわたって図書館を活用するおとなを育てること」というある図書館長さんの言葉を紹介して発表を終了された。

◎質疑応答の概要

Ｑ：栗山町では公共図書館で10年研修の折に教員に図書館の使い方を指導することがある。教員に図書館の知識がなく、どう使わせたいかが分からない

Ａ：東京学芸大では学校図書館に関する講座を行って３年目になる。ぜひ全国で行ってほしい。また、教育委員会担当の研修で取り上げ、学校図書館への理解を広げてほしい。島根県では県を挙げて図書館活用について取り組んでいる。司書教諭は時間が確保されておらず、各校で行うのは難しい。（対崎）

Ｑ：北海道教育大学での取り組みはあるのか？

Ａ：司書教諭の養成講座で講義を行っている。学習に役立つブックトークや読み聞かせ、アニマシオン、ビブリオバトルなどをさせた。教員自身に調べてまとめるという体験が必要である。(元小学校長)

Ａ：恵庭市では学校司書と司書教諭が合同研修をしている。学校全体へも少しずつ浸透してきている。公共図書館の協力は欠かせない。（恵庭市司書教諭）

Ｑ：学校図書館整備５か年計画では高専は含まれないのか。

Ａ：小・中学校が対象となっている。（対崎）

最後に震災対応実行委員長として視察した東北地方の学校図書館の様子を写真をもとに紹介いただき、分科会は終了した。

（文責　札幌市立小野幌小学校　山田佳子教諭）

学校図書館情報

◆第45回北海道学校図書館研修講座へ参加を
基本がわかる！　具体的にわかる！

・日時　１月７日(月)～９日(水)
・会場　北海道立道民活動センター（かでる２・７）他
・講演　「新学習指導要領と学校図書館」
　東京学芸大学 特任教授　対崎　奈美子 氏
　（全国学校図書館協議会参与）
・講義・実習・討議・交流の充実した３日間
※詳しくは案内要項またはＨＰでご確認ください。

◆第40回中学生作文コンクール審査終了

作品応募、審査協力ありがとうございました。

「勇気」のテーマで数多くの作品が寄せられました。生徒数が減少する状況下で、前回実績を3,000点近く上回り、23,236点の応募が寄せられました。引き続き、参加応募校の拡大と応募数の増加を期待します。

中央表彰式　１月７日(月)　13：00～15：00
ほくでん本社７Fホール

◆第33回「絵と文による冬休み読書大賞」へ応募を！

冬の北海道独自の感想画と感想文、感想絵ハガキによるコンクールです。

今年は「北海道青少年のための200冊の本」（学年指定なし）の中から本を選び、読んだ感動を絵と文で表現したり、ハガキの形で表現します。学校、学年、学級単位での応募を期待します。今回もたくさんのすばらしい作品に出会えることを楽しみにしています。

◆文部科学省サイト内に、「司書教諭　よくある質問集」（11月６日）掲載

司書教諭の仕事や資格取得についての説明が、Ｑ＆Ａ形式でまとめられています。

また「司書教諭といわゆる学校司書に関する制度上の比較」も掲載されています。

文部科学省サイト内　「司書教諭　よくある質問集」

◆『子どもと本をつなぐ図書館179』（３月28日）発行
「北海道内図書館における子ども読書活動取り組みの現状と事例研究」調査報告書

北海道図書館振興協議会は、H22・23年度に行った調査研究事業の成果として、「子どもと本をつなぐ図書館179」を発行しました。

道内の８人の司書が集結し、調査研究チームを編成してまとめあげたものです。先進的な市町村の事例や、今すぐ参考にできそうな事例が多数掲載されています。

北海道立図書館ＨＰ＞連携のページ(関係団体等)＞北海道図書館振興協議会＞刊行物＞研究報告書『子どもと本をつなぐ図書館179』

事 務 局

事務局長　齋　藤　昇　一（札幌簾舞中学校校長）
TEL 011－596－2320
FAX 011－596－2321
事務局校　札幌市立平和通小学校
事務局次長　野村　邦重
〒003-0027　札幌市白石区本通15丁目北３－１
TEL 011－863－0235　FAX 011－863－0265

Amenity
B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティＢコート」ポリプロピレンフイルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用ください。

キハラ株式会社
〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
ＴＥＬ（011）857－3331
ＦＡＸ（011）857－5211

◆『コミックふるさと北海道』（5月24日）発売

北海道と(株)マガジンハウスの民間協働プロジェクトとして、北海道ゆかりの漫画家12名が“ふるさと北海道”を描いた北海道の魅力満載の『コミックふるさと北海道』が全国で発売されました。マガジンハウス 880円(税込)

執筆している漫画家は、安彦良和、唐沢なをき、荒川弘、モンキー・パンチ、大和和紀、布浦翼、前川たけし、恵三朗、青空大地、いくえみ綾、篠有紀子、香山梨緒(敬称略)。

「北海道に遊びに、暮らすために“行きたい”と思う作品」という作品コンセプトのもと、漫画家それぞれの北海道への思い、北海道の好きなところ、好きな食べ物や作品の舞台となった地域を紹介しています。北海道の大自然や、北海道で見られる野生動物、独自の歴史や文化が作品中に登場します。必見。

編 集 後 記

今年は各地で観測史上最も遅い初雪というニュースが話題になりましたが、皆様の地域ではいかがでしたか。学期末を迎えてお忙しい毎日をお過ごしのことでしょう。本号は、第58回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。また、９月に行われた第54回北海道図書館大会、10月の第34回全道高等学校図書研究大会の報告も掲載しております。

各地から届いた感想文を読んで、読書の大切さを改めて感じています。来年も多くの児童生徒の皆さんがコンクールに参加してくれることを期待します。

担当：杉本　操　村山　知成　佐藤　秀則
野村　邦重　飯島　道恵

ホームページアドレス
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/